

清河八郎 再評価の動き

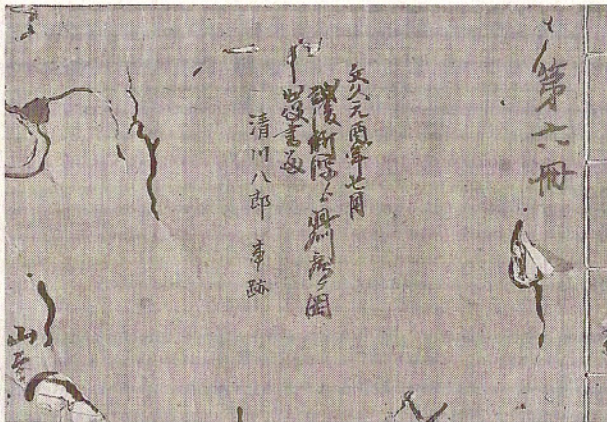
「町人無礼切り」 覆す新資料

旧清川村出身の志士

旧清川村(現庄内町)出身で、尊皇攘夷運動などに携わった幕末の志士・清河八郎(1830〜63年)が今年生誕180年を迎えたのを記念して、東京都内で来月5日、シンポジウムが開催される。地元からはバスツアーが企画され、山形大の山本陽史教授が、清河の再評価をテーマに基調講演を行う。清河の活動歴に暗い影を落としていた「酔って町人を切り、幕府に追われた」との通説を覆す新資料も見つかると、区切りの年に故郷の偉人を見直す動きが広がっている。



清河八郎の肖像画(清河八郎記念館提供)



新資料となった山本啓助の手帳(千代田区立四番町歴史民俗資料館提供)

清河は若くして江戸に学び、文武両道を修めた才人で、新撰組の前身で尊皇攘夷を指す「浪士組」を結成するなど尊皇攘夷、倒幕運動の先駆けとして活躍した。

新資料は、東京都千代田区の区立四番町歴史民俗資料館が数年前に収集した北町奉行所の同心・山本啓助の手帳。全6冊ある手帳のうちの一つに、逃亡する清河を追って新潟や山形などに出張した様子が記されている。

山本の手帳では、清河が町人を切ったとされる1861年5月20日の前日に、南北の町奉行所で清河ら8人を捕まえる命令が出され、打ち合わせをする記述があったという。今年3月、同資料館で手帳を活字化した際に発覚した。

生誕180年記念、来月5日シンポ

日本近世史の研究をしている早稲田大非常勤講師の西脇康さん(54)は、「無礼を働いたとされる町人は清河を捕まえる手先だと考えられる。危機を察した清河は逃げたが、捕まえ損なった奉行所が失敗を隠そうと、清河が酔って一般の町民を切ったという話にすり替えたのでは」と推測する。庄内町にある清河八郎記念館の斎藤清館長(80)も、「造り酒屋に生まれた清河が町人を切るほど酔うはずがないと思っていた。『町人無礼切り』の汚名が晴れてうれしい」と話している。

来月5日に大正記念館(東京都江東区)で行われるシンポジウムでは、山本教授が「清河八郎『回天の門』を再評価する」と題して基調講演を行うほか、山本教授や斎藤館長らによるパネルディスカッションも予定。6日には清河塾跡や北辰一刀流を学んだ千葉周作道場跡など、ゆかりの地を巡る見学会も行われる。シンポジウムと見学会には庄内町からのバスツアーも企画されている。参加費は宿泊料なども含めて1人3万3000円。問い合わせや申し込みは日本海トラベル(0234・43・4312)へ。